

ホロコーストと心理学：日常の中で無自覚になるもの

—— 2019年ベルリン・リサーチ・プロジェクトから ——

清 水 め ぐ み

要旨：2019年3月のベルリン・リサーチ・プロジェクトを通じて行われたホロコーストに関する論考である。ホロコーストについては、こわいこととして遠ざけられがちなことや、悲惨な出来事でそれが二度と起こらないようにともっぱら声高に喧伝されることが多い。しかし、本稿ではそれに関わっていくことの重要性を述べるとともに、そのためのひとつの心理学的な切り口として、よいものであろうとする人間の心のありようを概説する。悪を自分のものとして体験できずに投影し、また、よい／悪いに分裂してものごとをとらえて自らの安定のために理想化や否認といった原始的で未熟な防衛機制を用いてふるまうことがホロコーストにおいても、その後のホロコーストのとらえ方においても生じていることを例証した。特に、加害者とされる人々の叙述からうかがわれる否認と、現代に至るまでの救助者に対する理想化について詳述し、自らの暴力性に無自覚になること、また生きのびていくことが重視されること、ひいては道徳的な善悪について考察した。

キーワード：よい／悪い、投影、生きのびること (good/bad, projection, surviving)

I. はじめに

2019年3月4,5日にベルリンにて開催されたギーゲリッヒ夢セミナーに前後して、筆者は「ホロコーストと心理学」をテーマとしたベルリン・リサーチ・プロジェクトに参加した¹。3月3日には、小ぬか雨の中ベルリンにほど近いザクセンハウゼン強制収容所をプロジェクトのメンバーとともに訪問し、その三角形をした奇妙な形の敷地や、「労働は自由への道」と記された門扉、現在も保存されている収容所の建物の、とりわけその内部のトイレやシャワーの様子に驚きつつもそこに「生活」を見てもいた。しかし、足元のまだ新しい荒い砂利の、ゴツゴツとして冷え切った感触は、体の芯まで冷たくし、拭い去れない。ベルリンには、その中心部のブランデンブルク門や国会議事堂の傍に「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」がある。そこでは、約2万平米の敷地にさまざまな高さの石碑が設えられ、その地下には犠牲になったユダヤ人の遺品や、いくつかの家族の歴史が映像資料とともに展示されている。3月6日には同プロジェクトの一環としてそこを訪問したのだが、そこで得も言われぬ気持ちにさせるのは展示された資料の内容だけでなく、その石碑の間を巡るということの体験でもあった。石碑は、外側に近い方は50センチほどの高さで、一見その高さがずっと続いているように見える。しかし、敷地の内

側に行くと、石碑はいつのまにか自分の背丈よりもずっと高くなり（つまり歩いているうちにいつのまにか地面が低くなっていることに気づいて）、自分は石碑に埋もれてしまうことになる。自分の背をはるかに凌ぐ高さの石碑はひとつひとつ磨き上げられて冷たく、その石碑の間にいると体温が奪われて心底冷え切ってしまう。上空には春の初めの太陽が煌めいているのだがその暖かみは届かず、底冷えの感覚が今も残っている。

この場所にこれだけの規模で「記念碑」を作るというドイツの選択とそれを実現せしめたドイツにとってのホロコーストにまつわる思いはいかほどのものであつただろう。人間性のかけらもない極悪な所業がなされたことの記念碑を、おそらくはそれを忘れないために街の真ん中に置くというのは、二度とそうはしないという意志の表明でもあるだろう。「そうはしないという意志」をことさらに表明し続ける必要があるということは、裏を返せば、ことほどさように、意志の力ではどうにもならず、知らず知らずに少しずつ、無自覚なうちに、出来事は起きてしまっていたともいえるだろう。筆者は、浅はかにも、ホロコーストの非人道的であることは人口に膾炙しているのだし、このようなことは起こさないようにできるはずと、どこかで無邪気に思っていた。だが、今回のプロジェクトを通して、ホロコーストにおいて生じている人の心のありようは、私自身の日々の気づかずにいるさまざまな点において生じており、それに無自覚でいる限りは、その無自覚さを突き付けるような動きが自分をとりまく世界で起きうるのだろうという差し迫った感覚を覚えた。

ところで、ユング派分析家のギーゲリッヒは、魂の視点からホロコーストを理解する何らかの方法があるかという問いに答えて、「ホロコーストについては、ほとんどの書物が自我の視点²から記されて³おり、魂は「いまだに茫然自失」⁴であって、「おそらくまだ数十年の時間が必要でしょう」⁵とし、「こうした前代未聞の次元にある出来事について、たとえ何を語ろうとも、それはおそらくいつも、あまりにも語り足りなく、同時にあまりにも語りすぎなのです」⁶と、魂の論理 = psychology = 心理学⁷でホロコーストを語ることの困難について、むしろ不可能性について述べている。つまり、従来、個人であれ集団であれ人間の視点（または自我の視点といってもよいだろう）からホロコーストは記述されてきているが、魂の論理としての心理学の視点からはいまだ述べることはできないということである。しかし、語れないから、記述できないからと言って、茫然自失の状態に留まって考えずに済ませられることでもない。また、ザクセンハウゼン強制収容所やホロコースト記念碑の心底冷え切ってしまう感触によって麻痺したままにいるわけにもいかない。

ここでは、従来の心理学の視点を援用してホロコーストの傍らの日常の中で無自覚になるものに焦点を当てて、できるだけ自我の視点ではなく、魂の論理としての心理学の視点から検討していきたい。

II. 心理学的存在としての人間

1. 悪を身のうちに見出せないこと

東日本大震災直後の書店には『夜と霧』が平積みで置かれており、ホロコースト？ 何それ？ という世代にも同書に触れる機会が生じた。中には「こわくて読めない、特に旧版が」という声もあった。確かに、図版のページを開くとモノクロの死体の山を撮影した写真などととも「死んだ囚人たち」「人体実験」「集団殺戮のあと」のキャプションが目に入ってくるし、強制収容所という文字面にも「こわい」という一言では表現しきれない、しかし「こわい」としかいい表わせない何かがある。ホロコーストがこわいことを否定することはできないだろう。

ところで、ギーゲリッヒは、2018年3月に開催されたバルリン夢セミナーで夢のイメージに対して行うべきこととして「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男」を挙げ、旅先で夜を明かそうとした男が、扉から入り込んできた歩く屍体に「ああ、なんて寒そうにしているんだ。ほら、ぼくのベッドに入っておいで。この身体で暖めてあげよう」と告げて屍体を迎え入れ暖めていることになぞらえ、以下のように述べている。「その屍体を切り開いてはいけません。暖める以上のことをしてはいけません。それを——あなた自身の暖かさで、あなたの気遣いで、あなたが与える愛情で——暖め続けることです」⁸（ギーゲリッヒ、猪股訳、2018）。これは、こわいことを感じられない故に屍体を暖めた男の話ではあるが、私たちはこわがりすぎて屍体に触れることができずにいる。ホロコーストについては、だれしもこわいと感じずにはいられないだろうし、情動が突き動かされないということも考えにくい。私たちは、ホロコーストという未曾有の大殺戮の前にこわがり過ぎて、それに関わらずに、ホロコーストを生じせしめた悪を自分から遠ざけ、悪と目される反ユダヤ主義やナチス・ドイツを非難することで自分を安全な場所におこうとしている。夢では自分の中で起きている何かが自分の中で展開しており、外的現実として共有される現実とは区分される。それに対してホロコーストは、もちろん夢ではなく外的現実として実際に生じたできごとではあるが、夢で展開しているのと同じようなこと、つまり自分の中に起きている何かが、自分の外側の世界に展開したものとみなすなら、夢と関わるのと同様の姿勢がホロコーストを考えるとときには必要とみなされうるだろう。ところで、夢分析という語は、「私」の使用する言葉や概念で夢を「分析」し、「私」の現在の立ち位置から夢の意味を見出そうとするような営みを想像させがちである。これはまさに、自我的な、ごく限られた私が夢のありようを無視して、夢の側に立たずに、または有り体にいえば夢に寄り添わずに、都合よくわかりやすく夢を「切り開いて」理解しようとすることであるといえる。「切り開いてはいけない」のは、まさにホロコーストについて考えるときにも当てはまる。つまり、事後の、当事者ではない立場から、距離をとって、自分に都合よくとらえることは、ホロコーストを考えるうえで控えるべき態度であろう。「こわがることをおぼえるために旅に出た男」のようにこわがらずに関わることはできずとも、こわがっていて遠ざけざるをえないにしても、まずは得体のしれないものとして

それを暖め続けようとするのが、切り開かずに暖め続けようとするのが、必要である。

人がいかに自分の心の中の受け入れがたいものを外に投影してそれを恐れ忌避するかは、古くは紫式部集にも見られる。物の怪のついた人や鬼になって縛られている人を描いてそれに対して経を読む男を歌った「亡き人にかごとをかけてわづらふもをのが心の鬼にやはあらぬ」(妻についた物の怪を、夫が亡くなった先妻のせいにして手こずっているというのも、実際は、自分自身の心の鬼に苦しんでいるということではないでしょうか)⁹、またその返歌の「ことほりや君が心の闇なれば鬼の影とはしるく見ゆらむ」(なるほどいわれる通りです。それにしても、あなたの心があれこれ迷って闇のようだから、この物の怪が疑心暗鬼の鬼の影だとはっきりおわかりなのでしょう)¹⁰である。ここでは、自らに潜む名づけ難いもの、認めがたいものを鬼として外側に投影し、それを恐れ忌避し、退散させようとする動きがある。Jungによれば「それが内側から起こっているものであっても、人は常にものごとを外側の世界に見て、臆面もなく日々投影しているさまは信じがたいほど」(Jung, 2019, p. 51)であり、つまり「私たちは反対側に悪を見たがる」(Jung, 同上書, p. 51)のである。私たちが外側に見ている反ユダヤ主義やナチス・ドイツ的なものも、もちろん私の内側から起こっているものである。

2. よい／悪い

1945年4月30日のヒトラー死亡のニュースに接し、当時17歳でその後ナチス時代にまつわる著作を多く記しているパウゼヴァングは「絶望のあまり涙を流しました。ヒトラーがいない生活や世の中など、私たち若者はだれも想像できませんでした」¹¹と当時のヒトラーへの心酔を述べた後に「戦後になって、あの時代の国家社会主義体制がいかに若者の理想主義を利用し、濫用したかを知らされ、私は傷つきました。私たちはどれほど騙され、欺かれていたのでしょうか」¹²とその後の裏切られ体験を述べている。パウゼヴァングは、現代の私たちから見れば当時の加害者の側にいる人とみなされうる。しかし、「騙され、欺かれていた」という点では被害者でもある。当時17歳という年齢の、若さゆえの純粋さという点から見ても自分自身を振り返ることは難しく、自分ではない何か別の、言ってみれば悪者に利用されてこのようなことが生じたとどうしてもとらえずにはいられないことは想像に難くない。人は、被害者を無垢で善なる存在として、加害者を非人間的で極悪の存在であるとみなしやすし、さらに言えば、自分を悪とはみなしがたく、または自分の中の「悪」を見だしにくく、自分を無垢な犠牲者であり「よい」ものとして、「悪」を遠ざけ、他者に「悪」をみるところがある。

このことは、ホロコーストの歴史研究においても見て取れる。当初、ナチス政権やドイツという国家が悪であり、またその政権中枢に近い者ほど悪であって、裁かれるべき咎人であると考えられていたのは、ホロコーストという衝撃のなかでだれしもが防衛的になり、それは無垢な自分とは関係のない「悪」によるものであるとしかとらえようがなかったということにもよるだろう。そして、今でも検証が行われる中で、ホロコーストは反ユダヤ主義という悪によるものであり、「普

通の人々」に反ユダヤ主義が浸透していたからこそ可能だった、つまり反ユダヤ主義という悪ゆえにホロコーストが実現可能であったという見方¹³が示されている。一方で、ホロコーストは、ごくふつうのいわば善良な市民の手によるものという見地も提出されている。ユダヤ人に対する作戦に涙し、直接手を下すことを何らかの形で避けようとしていた何割かの人員も含めた普通の、反ユダヤ主義ではなかった人たちがいかにしてホロコーストに与していったかを記述し、ホロコーストは、必ずしも普通の人々に反ユダヤ主義が浸透していたから可能となったのではなく、特別に並はずれた悪人ではない、ごくふつうのありふれた人間の関与と実行によるものであったというもの¹⁴である。つまり、反ユダヤ主義という盲信や圧倒的な悪によってホロコーストが引き起こされたのではなく、普通のいわば善良な人びとの中の悪ともいべきものからホロコーストが生じてきたのであり、ホロコーストは単に並はずれた悪によるものだと私たちが切り離してはおけないという見地である。このことを受け入れがたいとする反響の大きさは、悪を自分からは遠ざけて他者の中に見るという強力な動きによるものだろう。

クライン Klein, M. (1935, 1940, 1946)¹⁵は、最早期の発達段階のありようを妄想分裂ポジション (paranoid-schizoid position) として、その後続く抑うつポジション (depressive position) との対比において描出している。最早期において乳児は、授乳する母親を全体的なものとしてとらえることができず、不快を取り除き満足を与える乳房を「よい対象 good object」とみなし、それに反して乳児を不快な状況に置いたまま授乳がなされず欲求を満たさない状況を「悪い乳房」があると体験して、ここに自らの破壊的な怒りを投影し「悪い対象 bad object」とみなしてこれを攻撃する。このポジションにおいては、よい対象と悪い対象が別々のものであって統合されず、本来は同じ対象の別の側面であることは認識されない。ここにおいて、よい対象は、すべてよい、理想化された対象とみなされ、悪い対象はそれとは逆に脱価値化され、極端な場合には魔術的・万能的に否認される。理想化やそれに対する脱価値化、否認は、妄想分裂ポジションに特徴的な原始的防衛機制であり、このポジションにおいては、自分を守る、防衛するために、原始的＝未熟な方法が用いられ、現実をそのものとしてみるできない。それに対して、抑うつポジションにおいては、妄想分裂ポジションにおいては別々であったよい対象と悪い対象が全体対象として認識されるようになり、一方で、悪い対象への攻撃が同時によい対象への攻撃でもあったことに気づき、それゆえにより対象を傷つけ破壊してしまったのではないかという罪悪感が生じ、対象を修復しようとする動きや自分の攻撃にもかかわらず生き残り世話をし続けた対象への思いやりが生じるとされる。この抑うつポジションにおいて、人は抽象的な思考を獲得し、現実検討力を身に付け、成熟した在り方を示すようになることとされるが、これは乳児期のある段階において達成されるわけではなく、一生を通じて進められていく。人は妄想分裂ポジションから抑うつポジションへ移行したとしても、抑うつポジションにとどまり続けることはなく、容易に妄想分裂ポジションに陥り、この両者の間の揺れを体験し続けていくということになる。

ところで、罪なく迫害されたユダヤ人に同情をしない人はいないだろう。彼らはナチス・ドイツという「悪」に対して「よい」存在であり、現代の私たちを含め無関係で傍観者ですらなかった人は、そこに安易に同一化しがちである。しかし、同一化も相手を自分とは別の存在として見ることを不可能にさせ、実態から遠ざかってしまう動きである。妄想分裂ポジションと抑うつポジションの揺れの中で、人は現実を現実として受け止めることができず、よい対象を理想化し、悪い対象を脱価値化したり否認したりすることを踏まえると、ホロコーストという人を平静ではいられなくさせる事態を前にすると、人は妄想分裂ポジションに振れてられしものが現実を現実として受け止めることができず理想化や脱価値化や否認を用いてしまうということになる。そこには、よい／悪いに引き裂かれた対象を全体としてとらえようと、現実を現実として見ようと試みを投入することが必要だろう。

3. 悪を消し去ろうとすること

ところで、ナチス・ドイツはそもそも悪だったのだろうか。はじめから殺人集団として登場したのであれば、国民の支持を集めることもなかっただろう。ナチス・ドイツはヴェルサイユ体制におけるドイツ経済の苦境を脱するための政策を施し、国民目線で暮らしやすい世の中を実現することをもくろみ、実際にドイツ国民はナチス政権下で少しずつ苦境を脱していったように見える。日々生き延びていきやすくなることは、毎日の食事にすら事欠くこともある中で何よりもありがたいことだっただろうし、新たな理念を提示してよりよい社会を創り出そうとすることが国民に歓迎されないはずはない。実際、食生活やインフラ整備の面で健康で快適な生活を実現しようとするナチスの政策は、そのいずれもが行き過ぎている感を免れないものの、数多く実施された¹⁶。しかし、ナチス・ドイツのいうよりよい社会とは、ダーウィンの進化論の延長線上にある“進化した”“優等な”ドイツ民族の純血が達成された社会であり、つまりユダヤ人をはじめとした“劣等な”者の排除はその目的に適うもので、その観点から「悪いもの」の排除、つまりユダヤ人の殲滅という「最終解決」へと動いていった。そこには、悪を排除する、滅ぼす、という考え方が根底にあるといえる。これは、悪の根源を見つけ出して、それをなくせばよくなるのだという単純な因果論に基づいているのだが、もちろん悪の根源とみなされた何かを排除したとしても社会が「よく」なるわけではない。悪の根源とみなされた何かは、その実体として悪なのではなく、悪とみなされたもの、すなわち悪を投影されたものにすぎないからである。

因果論で考えると、ホロコーストを反ユダヤ主義に還元し、反ユダヤ主義思想を根絶すればホロコーストは起きないということになる。しかし、考えてみれば、もう二度とホロコーストが起きないような社会を実現するために、反ユダヤ主義や時の為政者やそれに与した人々またはその国民を悪として、つまり何者かに悪を帰属させて、自分から遠い場所に置き、それを排除しようとするならば、人々が生活しやすいよりよい社会の実現を目指し、純血ではないものを悪として社会から排除し殲滅させようとしたナチス・ドイツと同じ轍を踏むことになるだろう。そし

て、ここでも、何かをないものにしようとするほど、それは何らかの形で顕現せざるをえないという動きが生じるだろう。ナチス・ドイツを忌避し、ホロコーストを理解しがたいものとして遠ざけておきたくもあるが、それゆえになお、忌避せずにいること、遠ざけないでおくことが必要なのだろう。

当時のユダヤ人の記述は数多あり、また一人ひとりの体験も可能な限り掘り起こされ残されようとしている。本稿では、それを取り上げることはしないが、その一人ひとりに思いを馳せ、耳を傾けることが大切であることは言うまでもない。ここでは、当時を生き延びることにおそらく必死であったであろうと思われるドイツのんびりと、多くのユダヤ人を救った日本人外交官の杉原千畝の様子を二次資料に求め、そこから彼らの声に耳を傾け、彼らが日常を生き延びるために、否認されていったことないしは無自覚になっていったものについて見ていく。

III. ホロコーストと同時代を生きること

1. あるドイツ人の人生—ポムゼル

2016年に公開されたドキュメンタリー映画『ゲッベルスと私』（原題：EIN DEUTSCHES LEBEN Was uns die Geschichte von Goebbels' Sekretarin für die Gegenwart lecht）は、当時のアーカイブ映像とともにナチスの宣伝相ゲッベルスの秘書の一人であったブルンヒルデ・ポムゼルがインタビューで回想する場面が映し出された。ポムゼルの独白は同名の書籍¹⁷として出版された。同書よりブルンヒルデ・ポムゼル（1911-2017）の来歴をみてみよう。父親が第一次世界大戦に出征し1918年に帰還。厳しく育てられた。住まいは、ベルリンのズートエンデ（「シュテグリッツの中でも高級な一画」同上書、p. 46）で、中等学校卒業後はユダヤ人ベルンブルーム氏の高級衣料品店で2年間働き、その間に速記等を身につけ、その後2年間は近所のユダヤ人で保険仲買人のゴルトバルク博士の下で働いたが、仕事が減り経済的に苦しくなっていたところ、1932年恋人を通じてヴルフ・ブライらのタイピストとして働くようになり、1933年にブライに言われてベルリン国営放送局で働くにあたってナチ党员となる。1942年に宣伝省に移り、秘書の一人として勤務していた。終戦時にはソ連軍にとらえられ、抑留生活を送り、その後ドイツ公共放送連盟で60歳まで勤務した。本稿では、(1) ユダヤ人との関わり、(2) 仕事と生き延びること、の2つの観点から、同書のポムゼルの独白を引用する。

(1) ユダヤ人との関わり

当時、またそれよりも古くから反ユダヤ主義がドイツ社会に浸透していた¹⁸という調査がある一方で、ユダヤ人は産業の担い手でもあり、取引先でもあることから排除に対して反対する声もあった¹⁹が、ポムゼルは「1933年より前は、誰もとりたててユダヤ人について考えていなかった。あれは、ナチスがあとで発明したようなものだった」²⁰「ユダヤ人に敵意などもっていなかった。父さんはむしろ、顧客にユダヤ人がいることを喜んでいて。彼らはいちばんお金持ちで、いつも

気前がよかったから』²¹と述べ、ナチスが政権についてまもなくの時期には「すべてに小さな矛盾があったけれど、私はそれをさほど真剣に受け止めていなかった。その種のものごとには本当に関心がなかったの。(中略)今の私は当時どんなふうに考えていたかがわからない。あのころはただもう、気づいたらあそこに入り込んでしまっていた」²²。実際、ユダヤ人の友人のエヴァ・レヴェンタールにコーヒーをおごる約束をしていた日に、ナチ黨員になるための申込をすることになり、それをエヴァに伝えると「じゃあ、おともするわ」と一緒に支部に行った²³という。以後、月日を経るにつれてボグロムなどのあからさまな迫害が増してくることについてポムゼルはどう見ていたのだろうか。「最初の変化を感じたのは、ユダヤ人の店が消えはじめたときだったわ。(中略)誰かが店をたたむのは、悲しいけれど日常茶飯事になっていた。ユダヤ人の経営でなくても、たたまれた店はたくさんあった。(中略)ユダヤ人の店へのボイコットが徐々に起きるようになった」。「ユダヤ人がどこかに移住をしているという記事を、新聞で目にするようになった」²⁴「強制収容所が作られるようになって(中略)人々はこう言った。そんな施設に収容されるのは、政府に逆らった人や殴り合いの喧嘩をした人だろうと」²⁵。「東部から多数のドイツ人が戻ってきているからだ、私たちは繰り返し説明された。ズデーテン地方に住むドイツ人が戻ってきたので、空になった村に人を入れる必要がある。そこにユダヤ人を送り込めば、彼らもやっとなつになれる——人々はそれを信じた」²⁶。このように見ていたことについて他者から信じてもらえないことに対しては「みんな、私たちがすべてを知っていたはずだと思っている。でも、私たちは何も知らなかった。すべてはしっかりと隠されたまま、進行していた」²⁷が、それは「1938年11月にあの恐ろしい出来事(水晶の夜)が起こるまで」²⁸のことだった。そして、その後友人のエヴァとの関わりを振り返ってポムゼルは以下のように述べている。「1942年に宣伝省で働くようになってもまだ私は、エヴァのところにとときき足を運んでいた」²⁹が、エヴァに「放送局にまた遊びに行こうかしら、と言われた。それはもう無理だった」³⁰ことはわかりながらも、「政治の世界で何かが起きているせいで、エヴァの生活が危険にさらされているだなんて、考えもしなかった。人々はただ、明るくのんきな生活を続けていた」³¹。「そして、エヴァは突然いなくなった。(中略)強制収容所にいるのなら、そのほうが身は安全なのではないかとも思った」³²。そして「人々は自分の生活を守るだけで手いっぱいだった」³³。すでにホロコーストを知っている現代の人間からしてみると、当時のドイツ人はみな進んでユダヤ人を死へ追いやったか、知っていて見殺しにしたのだろうかととらえがちである。しかし、地球上のほとんどの地域と瞬時につながることのできる現代において数多の非人道的な事件がある中で、私たちはそれに対して手助けをしないどころか、ほとんど知ることもなく、また知ろうともしていないことに鑑みるに、ポムゼルの語りは真実味のあるものと感じられる。自分自身も、当時その場にいたら、おそらくそんなふうだっただろうと思わざるをえない。

その後、「エヴァのことはずっと頭から離れずにいた」³⁴ポムゼルは、数十年後に彼女が1945年に強制収容所で死亡したことを知り、エヴァを助けたりはできたかもしれないが、わずかな稼

ぎを食べ物でなく煙草代に使うエヴァを見て、助けられないと考えたことを「早合点だった」³⁵と語っている。人道的な見地からは、瑣末なことに左右されずに人命を助けるべきだというのは正論であるが、日々の糧にも事欠きながらも煙草を買う人を目の前にしたら、自分を大切に考えない人に対して何をしても役に立たないだろうと考えるのは特段に冷酷なことでも残虐なことでもなく、理解に難くない。実際、友人として食べ物ではなく煙草を買ってしまうエヴァのどうしようもない窮地に思いを馳せ、おせっかいだとしても関わり続けることはなかなかできることではないだろうし、そうまでして助けようとするならば、それは救済者コンプレックスのようなものに突き動かされているとみなすこともできよう。

(2) 仕事と生き延びること

ポムゼル自身は、「政治に無関心だった」³⁶が、放送局や宣伝省での高給に甘んじ、自宅が空襲に遭った時にゲッベルス夫人からスーツを見舞いとしてもらったことについて「あんな上等なスーツに袖を通したのは生まれて初めてだった」³⁷と体制に抗わず、利益を享受していたようである。ナチスへの抵抗運動が起きていることは知りつつも『『ノー』をいうことはできなかった。『ノー』と言うのは、命がけのことだった』³⁸と、単に仕事上の立場に留まらずおそらくは彼女自身の姿勢として、述べている。ゲッベルスの「君たちは総力戦を望むか」の演説に対して「その瞬間ゲッベルスをとても恐ろしいと思ったわ。(中略)でもそれをまた心に封じ込めてしまった」³⁹と彼女にとっての小さなほころびは立ちどころに縫い合わされている。仕事については「きっちりと正確にやっていたから、人からは信頼されていた。(中略)その仕事が良いものだろうと悪いものだろうと、放送局で働こうが宣伝省で働こうが、私にとっては同じだった。それはどうでもいいことだった」⁴⁰とし、終戦間近に実家に留まる機会があったのに「(仕事に)なんとしても戻ろうとした私はなんて愚かだったのかしら。事態がどう動いていくかに、私は思いが至らなかった。おそらく、あのころの私は何も感じられなくなっていた」⁴¹と、ある種の感情的な麻痺ゆえに自己保存的な行為ではなく仕事優先の選択をする忠実で仕事熱心なありようが語られている。その背景として「ともかく私はあのころ、なんとかしてお金を稼がなければならなかった」⁴²のであり、生活していくこと、生き延びることが最優先だったことがうかがわれる。また、それだけではなく、才能を買われて出世し、権力の近くにいることを指向する、あまりに人間的なありようが浮かび上がる。

極悪なナチスの手先としての「ゲッベルスの秘書」という予想とはまったく異なる、ごくありふれた「深く考えていなかった」⁴³人物像がポムゼルの語りからは浮かび上がる。そこには自分の情緒や感情に無自覚になっていたポムゼルのありようが垣間見える。ポムゼルは「あのころと似た無関心は今の世の中にも存在する」⁴⁴と述べているが、無関心さはもちろん、ポムゼルの深く考えていないありさまも、自分の情緒や感情に無自覚になっていることも、今の世の中を生きる私に確かに存在している。ポムゼルの相似形が私であり、ポムゼルと同じ状況にあれば私もポムゼルと同じようにふるまい考えただろう。ある見方をすれば、ナチスの人間であるポムゼルの

あり方は、私の中にあるのである。

2. 「悪の陳腐さ」、普通の人びと「第101警察予備大隊」—アイヒマン、トラップ少佐の涙、ホフマン大尉の腹痛—

ユダヤ人移送局長だったアイヒマンについて、アーレントは「悪の陳腐さ」⁴⁵と表現しつつ、もちろん「このことが〈陳腐〉であ（中略）るとしても、また（中略）アイヒマンから悪魔的な底の知れなさを引き出すことは不可能だとしても、これは決してありふれたことではない」⁴⁶としている。アイヒマンの良心の咎めのなさともいうべきものは、ありふれたことであるようには到底みなされえない。しかし、生きることに汲々として、何も考えずに命令に従順であることは、私たちにもよくある、ありふれたことと見ることができる。

イスラエルでのアイヒマンの裁判を傍聴していた開高健は「……命令でした。すべて命令でした。私がうけた教育と時代は国家の命令が神聖で犯すべからざるものであることだけを教えました。私個人は反ユダヤ主義者ではありませんでしたが、巨大な、複雑な機構の梯子が命令の実行を要求するのです」とアイヒマンが「来る日も来る日も、午前中も午後も、あらゆる糾弾と質問に対して彼はつねに一つのことしかくりかえさない」⁴⁷様子を記述している。アイヒマン自身は、自らを「法の前ではなく神の前で有罪」⁴⁸と捉えていたが、これは彼自身が「常に法に忠実な市民」⁴⁹であり、「命じられたことを甚だ忠実に果たしていた」⁵⁰ことを指している。アイヒマンは「自分の昇進には恐ろしく熱心だったということのほかに彼には何らの動機もなかったのだ」⁵¹。ここでも自分の所属するナチスの組織に与して、つまり集団に帰属して、誰よりも安全な立場を確保することに汲々とする、つまり、生き延びようとして必死なあまりに、想像力も道徳心も見失い、自らの感情にも目が向かなくなった人のありさまがうかがわれる。

アイヒマンの「法の遵守」や命じられたことを忠実に行うことは極端で、それと同列には論じられないにしても、私たちも何も考えずに決まりごとを守って生活し、よかれと思うことを行っている。心理臨床においても、表面的な困難をなくすことが問題の解決として重視され、社会に求められる心理職が標榜される中で、そのようなことを直線的に達成しようとするのがそれぞれの心理職の中の動きとして生じるなら、アイヒマンと同じ何かが私たちにも動いていると言えらるだろう。目の前の一人のクライアントの困りごとを前にして、その人の思いや独自のありように思いを馳せ、その上でまさにその目の前の一人にとって、顕現している「問題」が何であるにしても、真に取り組むべきことは何であるのかを考えて関わるのが心理職である。しかし、例えば「不登校児童・生徒を減らす」という命題が掲げられる中で、それが強烈な圧力として働くとき、目の前の一人ひとりの児童・生徒のそれぞれの独自さやその人にとっての問題そのものを蔑ろにして「不登校児童・生徒を減らす」ことに第一義的に取り組まざるを得なくなるのだろうか。「悪の陳腐さ」を思うとき、生き延びていくためにはそれこそが自分の仕事ととらえて、目の前の人を人とも思わず、その残酷さすら認識せずに動くことはありえるのである。

このようなことは、第 101 警察予備隊のトラップ少佐やホフマン大尉についての記述からもうかがえる。ホロコーストの犠牲者が 600 万人にも上ると言われる中で、その 20~25 パーセントにあたる射殺を担った警察大隊についての調査で、ブラウニングはハンブルクの一般中年男性によって構成された「年齢、選抜、ナチ化、訓練と教化、そのいずれにおいても典型的な警察大隊ではない」⁵² 500 名弱の第 101 警察予備大隊がいかにして、38,000 人を殺害し、45,000 人を絶滅収容所への強制移送を実行したのかの解明を試みている⁵³。ホロコーストの実行者である彼らを、信じられないような悪魔だとしておきたいのが私たちの心情である。また、この数字を見るにつけ、彼らは血も涙もない凶悪な殺戮者集団にちがいないと思いがちである。が、同書で明らかにされるのは、ユダヤ人の射殺命令を下すにあたって当惑し泣きわめく指揮官のトラップ少佐⁵⁴ であり、そのトラップ少佐の「この任務を遂行する力がないと感じる年長者はだれでも、任務から外れることができる」⁵⁵ との提案に応じて 10 人から 12 人の隊員が任務を外れ、しかし、そのようなスタートであったにもかかわらず、やがて上述の数にのぼる殺戮を実行した人々のありようである。「私は、誰からも臆病だと思われなくなかった」⁵⁶ 「胸がむかつきこれ以上耐えられませんでした」⁵⁷ 「何年かしてはじめて、我々のうちの幾人かは、当時起こったことについて本当に自覚するようになったのです。……後になってはじめて、あれは正しくないことだったという自覚が私の心に浮かんだのです」⁵⁸ といった隊員たちの声からは、誰もが進んでユダヤ人を殺害していたわけではなく、他者からの非難を浴びずにその集団に帰属するために、つまりそこで生き延びるために、彼らが何も深くは考えずに、沸き起こる身体反応や情緒を押さえ、感情を否認して、何かに無自覚になって殺戮を行っていたという側面が浮かび上がる。

殺戮という行為について、意識されず、したがって、ことばにされえない痛みを感じていたのではないかと思われる人物がホフマン大尉である。ホフマン大尉は、作戦を任されるように上官に懇願し、熱心に仕事をこなそうとしていた。しかし、彼は『『いわゆる』腹痛の発作を起こすとベッドで安静にしていなければならなかったが、それはいつも決まって、中隊が不快な、あるいは危険な行動に参加するかもしれないとき、起こる』⁵⁹ のだった。さりながら、ホフマンは命令に忠実で任務を遂行することにためらいがあるようにはみえず「殺戮に係る任務から逃れるために病気を利用したというより、あらゆる努力を払っていた」⁶⁰。それゆえ「もし大量殺戮がホフマンに腹痛を与えていたとすれば、それは実は、彼が心の奥では良心の呵責を感じ、彼の能力の最上のもに打ち克とうとしていたことを示している」⁶¹ と考えられよう。腹痛の発作として表現されることを除いては、認識されえない彼の良心の現れでもある及び腰と任務の遂行にまつわる彼の意識的な思いとの乖離がうかがわれる。ホフマン大尉が、その立場から命令に背くことはおろか異を唱えることは、できないことである。生き延びるためには、良心と任務遂行との葛藤にすら無自覚にならざるを得ず、自覚されない良心の痛みや及び腰である感覚は、腹痛として表現されたのだろう。生き延びることを前に、殺戮される無数の人々がいるという現実が見えなくなり、またはその現実を否認している中で、腹痛こそがその現実を感知している現れだったと

いえよう。

3. 大量救助者—杉原千畝

ここまで、「ナチス・ドイツ」側と目される人々、すなわち「悪い」ことにされている人々を見てきた。ここで、現代においても「よい」行いを為した見習いたい人物について触れてみたい。1940年にリトアニアでユダヤ人に日本の通過ヴィザを発行し数千人の命を救った元外交官の杉原千畝は、後年その功績によってイスラエルから〈正義の異邦人〉として称えられている。レビンは「アーレントの名著『エルサレムのアイヒマン』の命題を裏返して〈大量救助者〉にあてはめることは、議論をよび起こすかもしれない。アーレントは、アイヒマンを〈どこにでもいるような普通の男〉と定義している。逆にいえば大量救出者の場合も、複雑な動機や抑圧された欲望などなく、ただ淡々とことを進めただけなのかもしれない⁹²と述べているが、杉原は、戦時に同盟国のドイツに抗う対応を行い、親ナチスの上司の下でその意向に反してヴィザを出し続けたのだから、まさに人命を救う道徳的な行為を行ったのであり、英雄視されて当然でもある。確かに、身を粉にしてたくさんの人びとを救うという行為は賞賛されこそすれ、非難されるべきものではない。だが、彼を「救済者」として見る、その見る側の姿勢は杉原の行為を理想化していると言えなくはないだろうか。「救う」行為をよいものとし、理想化する背後には、悪いものがあり、その悪いものとはすなわち自分自身の攻撃性や破壊性を投影したものである。ここには当然ながら、攻撃者＝ナチスとし、そこからの救済者＝杉原として、杉原とナチスをよい／悪いに分裂させてとらえる私たちの心の動きが反映されている。しかし、冒頭に述べたように、よい／悪いに分裂させて対象をとらえる在り方は、全体をとらえられない部分的なとらえ方をする未熟な在り方であり、全体を見損ねてしまっていることを考えると、杉原を救済者として崇める動きは、検討される必要があるだろう。理想化をする動きの反対側には、自分の破壊性や攻撃性を投影して悪いとみなした対象を脱価値化し、否認する動きがあるからである。救済を崇める、救済を見習おうとする意識的な動きには、それとは真逆の破壊的で暴力的なものが蠢いているのに、理想化によってそのことに気づかず、無自覚で、全体をとらえられない状態にとどまらせ、その状態は容易に反転を招く性質があるからである。杉原の行為そのものは、特に現れとしての行為そのものは非難されるべきものではなく、まさに見習われるべきことではある。しかし、それを賞賛する動きには、私たちの無自覚な攻撃性や破壊性や暴力性の反転した現れがあることも認識すべきであろう。それについて無自覚であることは、破壊的で攻撃的な動きを顕現させることになる。

IV. 考 察

悪を身の内に見出すことができず、他者に投影し、それを消し去ろうとする動きがあることは冒頭で見てきた。ここまで描出してきたことから、おしなべて悪とみなされるナチス・ドイツに

かかわる人々が、それぞれに必ずしも悪徳とはいえないような事情から、知らず知らず無自覚のうちに、とてつもなく破壊的な行為に加担していたことが浮かび上がってきた。そこでは、目の前のことに必死になって、あるいは「よい」ことのみで、自らのすべきことをしていた様子がうかがわれた。また、現代においても賞賛される行為についても概観した。それらの「よい」ことの背後で無自覚になっていたものとは何であったのだろうか。以下、

1. 「私の」暴力性

村上春樹は、ナチス・ドイツによるオーストリア併合や日中戦争時の南京での体験にエピソードとして触れられている『騎士団長殺し』にまつわるインタビューで主人公の敷地から掘り出された騎士団長が「過去からのメッセンジャー」かもしれないとしつつ、それは「どれだけ穴を掘って隠しても、出てくる時には出てくるんです」⁶³と述べ、聞き手からの「戦争のような人間が持つ暴力性は現代社会の中でもあるか」という問いに「心の底の魑魅魍魎や闇の世界が、今の SNS とかのインターネットの仕組みの裏から」⁶⁴出てきており、「心の底の闇の世界に潜む暴力性のしるしのようなものを、日常的なものごとの中に感じないわけにはいかない」⁶⁵と述べている。現在はそれが反ユダヤ主義やナチス・ドイツとして形を成さないにしても、類似の事象は随所に見受けられる。言ってみれば、私たち自身の「心の底の闇の世界に潜む」反ユダヤ主義やナチス・ドイツ的なものが漏れ出て蠢いているともいえるだろう。暴力性について山極寿一は「何らかの葛藤でお互いが競合し合う状況になったときにそれを解決する手段として使われてきました。しかし今は逆に集団への帰属意識、あるいは自分のアイデンティティというものを獲得するために暴力が使われているのではないのでしょうか」⁶⁶と述べている。ホロコーストは、領土や資源の獲得を目指した帝国主義のなれの果ての産物である反面、アーリア民族の優越のためにユダヤ人の殲滅を目指すという、アイデンティティ獲得のための暴力であったともいえる。実際、目の前にあるモノの争奪戦における暴力ではなく、目に見えない何かのために暴力が行使されたとみることができよう。アイデンティティ、集団への帰属、自分のよって立つところ、というようなものを、その実体もわからないまま求めていることにおいて、自分自身で制御しうる範囲を越えた力に突き動かされていることは、前述したポムゼル、アイヒマン、トラップ、ホフマンにもいえる。ポムゼルは、ユダヤ人の友人エヴァと競合し利害相反があるような状況ではなく、むしろ彼女を助けようとしながら、ドイツ人として生活していくことの中で結果的に友人を見捨てるかたちとなり、アイヒマン、トラップ、ホフマンらも、彼らの「悪」によってではなく、その職業的立場から—もちろんその職業選択において個々人のパーソナリティ傾向が反映されるにしても—つまりは集団への帰属意識を維持するうえでユダヤ人虐殺に与したとみることができよう。

現代に生きる私たちは、自分自身が暴力性と無縁であるとみなしがちであるが、山極の提示する現代の暴力性のあり方は、今日ますます顕著になっているようである。集団への帰属意識やアイデンティティの獲得は、個々人と社会とのつながりにおいて当然のごとく重視されており、生

きる上で、生き延びていく上で必須の、ある意味で安全感のようなものを構成するアイテムとなっているともいえる。それを得るために、否認し無自覚になるものがあることは、現代においてこそ認識される必要があるのだろう。

2. 生き延びることと無自覚になること

「生きること」について考えてみると、日々を、その時々をの日常生活を生き延びていくことの大切さに否を唱えることは難しい。「生きる」ことに価値が置かれ、それに対して「死ぬ」ことは避けられ、先延ばしにされ、例えば病気や事故や自死などのいわば自然でない死は何としても減らすべきであることが自明のこととされている。生き延びるということは、身体の生死に及ぶようなことでなくとも、生活をしていくことや生き活きと生きていくことが望ましいという観点からも大切なこととみなされる。最近では哲学者の鷲田清一がその名も『生きながらえる術』を上梓し、消費社会において生業を学び直すことの必要性や「生き延びるわざ」⁶⁷の重要性を説いている。これらは、今日の生きる糧をどう得るかという意味での「生き延びる」ことではなく、より人間らしい、よりよい生を送るための姿勢について扱われており、それは裏返せばいかに現時点での生活が事足りたものであっても、先々の見通しがきくわけでもなく、安心できる保障はないという、実体のない恐れに基づいているともいえる。翻って1930年代のドイツを見てみると、ヴェルサイユ体制における膨大な賠償金を課せられた行き詰まりの中で、文字通りなんとか日々の糧を得て生き延びることが必須であっただろうし、生き延びていくことは、単に物質をどれだけ確保できるかに留まらず、人間として何に帰属し、どうやってより幸福に生きていくかという、いわばアイデンティティや先々の保障を獲得するためという意味でもあっただろう。当時の多くのドイツ住民にとって、生き延びていくことは、日常生活のための物質を確保するという点でも人間らしく生きていくという点でも、重要なことであつたといえよう。

ことほどさように、1930年代においても現代においても私たちは生き延びることに拘泥しているらしい。その中で、私たちには何が起きているのだろうか。スタインは「私たちの社会のたえず変化する道徳的態度は、多くの状況で私たちが自分自身のすべてを全面的に肯定することを不可能にしている。私たちは自分の本当の感情を否認し、周囲とうまくやっていくために一ときにはそもそも生き延びるために—それらの表出を抑制せねばならない」⁶⁸（傍点筆者）と述べている。生き延びるために自分を全面的に肯定することが不可能になり、本当の感情を否認するならば、肯定されずに否認されたものは、抑圧され、忘れられ、無自覚なものになる。そして、それらは別の形で、外側に現れてくることになる。このことは、本論で描出したことを別の側面から説明している。

3. 改めて「よい」「悪い」について

II. においては「よい／悪い」をめぐる妄想分裂ポジションのありようをクラインの見解から

述べた。ここでは、別の見方を参照してさらに検討を重ねたい。

「よい」「悪い」についてヒルマンは「あるいはひょっとすると、非人間的な力のレベルにおいて、私たちは、悪と道徳性の根源を確かに区別するのはむずかしいのかもしれない」⁶⁹としている。道徳性は、それに先んずる悪を感知することによって生ずるものであり、悪と表裏一体をなすものである。ユングは「良心の原型式は逆説的である。たとえば異端者を火あぶりにすることは、一方では価値ある敬虔な行為であり—〔火あぶりにあった当の〕ヨハネス・フスでさえ火あぶりのために杭に縛られていたとき、言い伝えによれば〔一人の老婆が槓の束を持って彼の方によるよると歩いてくるのを見て〕『おお、聖なる単純さよ！』と叫んでこのことを認めた—、他方では容赦のない残酷な復讐欲の野蛮な現れである」⁷⁰として、良心の現れが対極的な二つの側面をもつことを述べ、さらに、良心を慣習的な道徳律に基づくものと、「意識的な吟味」ともなった倫理的なものに区別している⁷¹。そして、「(倫理的な良心は)二つの決断ないしは行動様式がどちらも道徳的であると肯定され、それゆえどちらも『義務』だと認められているのに互いに衝突している場合に現れてくるもの」⁷²で「もしその人が十分に良心的であるならば、葛藤はとことんまでつきつめられる。そうすると創造的な解決が現れる」⁷³としている。上記でみた「生き延びること」は、ユングに照らし合わせると慣習的な道徳律であり、その一面的な価値に沿って意識的な吟味なしに行われていることであるといえよう。そこでは、倫理的な意味での良心、つまり反省的に、意識的な吟味をとめない、葛藤的である良心は無自覚になる。また「生き延びること」が道徳律によるものであるとすれば、「生き延びること」に一生懸命なあまりに、道徳律と表裏をなす悪、ひいては暴力性や破壊性が無自覚なものになっていたということでもあるだろう。「法の下では無実」と自らについて言明したアイヒマンは、法という慣習的なものには忠実であったが、その裏にある暴力性や破壊性は認めず、それらについては完全に無自覚であったと言えるだろう。彼が自分を「神の前で有罪」とみなしたことに、数十年後に萌した良心の咎めをうかがうことができるのみである。ポムゼルが数十年後に友人のエヴァの消息を尋ねることや、第101警察予備大隊の中に射殺命令に従えなかった人びとがいたことやホフマン大尉が作戦場面で腹痛を訴えたこと、さらにはトラップ少佐が命令を下すにあたって泣いたことは、その「生き延びること」という慣習的で、意識的な吟味や反省を伴わない道徳律の背後にある、一旦は意識されても押しやられ無自覚なものとなった良心の咎めから生じたものであり、道徳律に覆い隠されたものに生じた亀裂であるとみなすことができるだろう。

ここまで、ホロコーストの現場で、またその傍らで当時を生きた人々のありようを見てきた。そこでは、人間らしく生き延びていこうとする中で、否認されまたは乖離して、無自覚になっていったものが浮かび上がってきた。ところで、ベルリン・リサーチ・プロジェクトで感じた底冷えの感覚を、未だ筆者は拭い去ることができない。しかし、当時の人々がその底冷えすら感じられないほどに自らを麻痺させ、否認し、乖離させてきたのだとしたら、その底冷えを体験することは、時を経てホロコーストを考える者には避けては通れないことであり、その底冷えの感覚を

通じて考え続けることが必要なのだろう。

V. ま と め

冒頭でギーゲリッヒがいう「屍体を迎え入れて暖めていること」になぞらえて本論を進めてきたが、ギーゲリッヒは、ホロコーストを理解する方法について尋ねられて「こうした前代未聞の次元にある出来事について、たとえ何を語ろうとも、それはおそろしくいつも、あまりにも語り足りなく、同時にあまりにも語り過ぎなのです」⁷⁴と応じている。冒頭にも挙げたように、屍体を暖めるにあたって「その屍体を切り開いてはいけません。暖める以上のことをしてはいけません。それを—あなた自身の暖かさで、あなたの気遣いで、あなたが与える愛情で—暖め続けることです」⁷⁵（ギーゲリッヒ、猪股訳、2018）と制されているにもかかわらず、ここでは、一人ひとりのありようを切り開き、暖める以上のことをしてきたきらいがある。事後の現代からみる私にとって、全体を見ようとしても見えない、出来事の側に立とうとしても立てない、思いをはせるしかない中で知らずに自分に都合のよいとらえ方をしていないとは言いきれないもどかしさもある。もちろん、全体を見ようとしても、真に現実の全体を見ることはできない。それでも今回の論考を通じて、よくないことだから二度と起こさないように！ ということの、そのよくないことに分け入り、自分に起こりうることとしてとらえようとするのかすかな動きが生じたことが、筆者にとっては意義深いことであった。

ホロコーストについては、数多の書物、映像作品、報道があり、その一部を通じて、わかっていくつもりになっていたり、空恐ろしい気持ちになったり、またそれゆえに遠ざけようとするところが、少なくとも筆者にはあった。今回、バルリン・リサーチ・プロジェクトで、実際にその場所を訪れ、心底冷え切って麻痺するような感覚も含めて、書物や映像作品など、間接的な情報からは感じられないことを多く感じ、体験したように思う。だからといって、それが現実に触れたということではないが、実際に触れること、そこに分け入ることは、間接的な情報の経験を越えた何か重要なことであるにちがいない。そして何より、本稿を著す機会を得られたことに感謝したい。今後、その場を訪れることや体験者の話を聴くことを通じての、より全体的な現実に触れることの意義については、心理臨床との関わりにおいて、さらに検討していきたい。

注

- 1 本リサーチ・プロジェクトの成果は、猪股剛氏の編集による論文集として2020年に出版される予定である。
- 2 Giegerichは具体例として「自我の視点」から記されているものを「事実の歴史的叙述、道徳的評価、生き延びた被害者たちの個人的経験などです」（Giegerich、猪股訳、2010, p. 270）と補足している。

- 3 ギーゲリッヒ (猪股 剛訳), 問いそれ自体を愛する, *Living with Jung*, 未公刊
(Giegerich, (2010), *Love The Questions Themselves, Living with Jung, in Henderson, Living with Jung: 'Enterviews' with Jungian Analysts, Volume 3, Spring Journal, Inc., p. 3)*
- 4 同上
- 5 同上
- 6 同上
- 7 心理学 psychology とは, つまり魂 psyche の論理 logic である。
- 8 ギーゲリッヒ (猪股 剛訳), 2018年3月2日ベルリン夢セミナー質疑応答, 未公刊, 公文佳枝の問いに対する回答
(Giegerich, (2018), *Question-Answer-Session, March, 02, 2018, Berlin*)
- 9 第44首, 山本利達校注, (1980), 紫式部集, 新潮日本古典集成 (第35回) 紫式部日記 紫式部集
- 10 第45首, 同上
- 11 パウゼヴァング, 高田ゆみ子訳, (2012), そこに僕らは居合わせた, みすず書房, p. 231
(Pausewang, G., *Ich war dabei Geschichten gegen das Vergessen, Patmos Verlag GmbH & Co. KG, Dusseldorf, 2004*)
- 12 同上書, p. 231-232
- 13 ゴールドハーゲン, 望田幸男訳, (2007), 普通のドイツ人とホロコースト, ミネルヴァ書房
(Goldhagen, D.J., *Hitler's Willing Executioners, Ordinary Germans and the Holocaust, New York, 1996*)
- 14 ブラウニング, 谷 喬夫訳, (2019), 増補 普通の人びと, ちくま学芸文庫
(Browning, C.R., *Ordinary Men, Reserve Police Battalion 101 and the Final Solution in Poland, revised edition, 2017*)
- 15 Klein, M., (1935), *A Contribution to the Psychogenesis of Manic-Depressive States, in The Writings of Melanie Klein, Vol. 1, Hogarth Press, London*
(クライン, 安岡 誉訳, (1983), 躁うつ状態の心因論に関する寄与, メラニー・クライン著作集 3 愛, 罪そして償い, 誠信書房)
Klein, M., (1940), *Mourning and its Relation to Manic-Depressive States, in The Writings of Melanie Klein, Vol. 1, Hogarth Press, London*
(クライン, 森山研介訳, (1983), 喪とその躁うつ状態との関係, メラニー・クライン著作集 3 愛, 罪そして償い, 誠信書房)
Klein, M., (1946), *Notes on Some Schizoid Mechanisms, in Envy and Gratitude and Other Works 1946-1963, Vintage 1997*
(クライン, 狩野力八郎ほか訳, (1985), 分裂機制についての覚書, メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂的世界, 誠信書房)
- 16 藤原辰史, (2016), [決定版] ナチスのキッチン「食べること」と環境史, 共和国, 及び小野清美, (2013), *アウトバーンとナチズム—景観とエコロジーの誕生—*, ミネルヴァ書房
- 17 ポムゼル, ハンゼン, 石田勇治監修, (2018), *ゲッベルスと私*, 紀伊国屋書店
(Pomse, B and Hansen, T.D., *Ein Deutsches Leben, Europe VerlagGmbH*)
- 18 ゴールドハーゲン, 前掲書
- 19 ブラウニング, 前掲書
- 20 ポムゼル&ハンゼン, 前掲書, p. 34
- 21 同上
- 22 同上
- 23 同上書, p. 52
- 24 同上書, p. 63
- 25 同上書, p. 64

- 26 同上書, p. 65
27 同上書, p. 65
28 同上書, p. 65
29 同上書, p. 83
30 同上書, p. 83
31 同上書, p. 84
32 同上書, p. 85
33 同上書, p. 86
34 同上書, p. 158
35 同上書, pp. 174-175
36 同上書, p. 35
37 同上書, p. 101
38 同上書, p. 81
39 同上書, p. 111
40 同上書, p. 136
41 同上書, p. 134
42 同上書, p. 167
43 同上書, p. 136
44 同上書, p. 172
45 アーレント, 大久保和郎訳, (1969), イェルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告, みすず書房
(Arendt, H., Eichmann in Jerusalem, A Report on the Banality of Evil, The Viking Press, New York, 1963, 1965)
46 同上書, p. 221
47 開高 健, (1991), 声の狩人, 岩波書店, p. 43
48 アーレント, 同上書, p. 16
49 同上書, p. 19
50 同上
51 同上書, p. 221
52 ブラウニング, 前掲書, p. 371
53 同上書, p. 370
54 同上書, p. 107
55 同上書, p. 105
56 同上書, p. 127
57 同上書, p. 120
58 同上書, p. 128
59 同上書, p. 195
60 同上書, p. 198
61 同上書, pp. 198-199
62 レビン, 諏訪 澄・篠 輝久訳, (2015), 千畝 新装版, 清水書院, p. 17
(Levine, H., 1997, In Search of Sugihara, Free Press)
63 村上春樹, (聞き手: 湯川 豊, 小山鉄郎), 村上春樹さんインタビュー 小説家 40 年と「騎士団長殺し」, 河北新報, 2019 年 6 月 11 日朝刊
64 同上
65 同上
66 山極寿一, (2011), 基調講演「暴力の由来」, ユング心理学研究 第 3 巻, 創元社, p. 39
67 鷺田清一, (2019), 生きながらえる術, 講談社, p. 3

- 68 スタイン, 入江良平訳, (1999), ユング 心の地図, 青土社, p. 79
 (Stein, M., (1998), Jung's Map of the Soul : An Introduction, Carus Publishing Company)
- 69 ヒルマン, 樋口和彦・武田憲道訳, (1990), 内的正解への探求—心理学と宗教一, 創元社, p. 121
 (Hillman, J. (1967), Insearch : Psychology and Religion, Spring Publications, Inc., Dallas, Texas)
- 70 ユング, 林道義訳, (1989), 心理学から見た良心, 心理療法論, みすず書房, p. 95
 (Jung, C.G., (1958), A Psychological View of Conscience, CW10, para 845)
- 71 同上書, p. 104
- 72 同上書, p. 105
- 73 同上書, p. 105
- 74 ギーゲリッヒ, 猪股訳, 2010, p. 270
- 75 注8参照

引用・参考文献

- アーレント, 大久保和郎訳, (1969), イェルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告, みすず書房
 (Arendt, H., Eichmann in Jerusalem, A Report on the Banality of Evil, The Viking Press, New York, 1963, 1965)
- ブラウニング, 谷喬夫訳, (2019), 増補 普通の人びと, ちくま学芸文庫
 (Browning, C.R., Ordinary Men, Reserve Police Battalion 101 and the Final Solution in Poland, revised edition, 2017)
- 藤原辰史, (2016), [決定版] ナチスのキッチン「食べること」と環境史, 共和国
 フランクル, 霜山徳爾訳, (1961), 夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録, みすず書房
 (Frankl, V.E., Ein Psycholog Erlebt das Konzentrationslager - Osterreichsch Dokument zur Zeitgeschichte I, Verlag fur Jugend und Volk, Wien, 1947)
- フランクル, 池田香代子訳, (2002), 夜と霧 新版, みすず書房
 (Frankl, V.E., Ein Psycholog Erlebt das Konzentrationslager - in ...trotzdem Ja zum Leben, Kusel-Verlag, Munchen, 1977)
- ギーゲリッヒ (猪股 剛訳), 問いそれ自体を愛する, Living with Jung, 未公開
 (Giegerich, (2010), Love The Questions Themselves, Living with Jung, in Henderson, Living with Jung : 'Interviews' with Jungian Analysts, Volume 3, Spring Journal, Inc.)
- ギーゲリッヒ (猪股 剛訳), 2018年3月2日ベルリン夢セミナー質疑応答, 未公開
 (Giegerich, (2018), Question-Answer-Session, March, 02, 2018, Berlin)
- ゴールドハーゲン, 望田幸男訳, (2007), 普通のドイツ人とホロコースト, ミネルヴァ書房
 (Goldhagen, D.J., Hitler's Willing Executioners, Ordinary Germans and the Holocaust, New York, 1996)
- グリム童話 (上), 池内紀訳, (1989), ちくま文庫, 1989
- ヒルマン, 樋口和彦・武田憲道訳, (1990), 内的正解への探求—心理学と宗教一, 創元社
 (Hillman, J., (1967), Insearch : Psychology and Religion, Spring Publications, Inc., Dallas, Texas)
- Jung, C.G., (1958), A Psychological View of Conscience, CW10, para 845
 (ユング, 林道義訳, (1989), 心理学から見た良心, 心理療法論, みすず書房)
- Jung, C.G., (2019), History of Modern Psychology, Lectures Delivered at ETH Zurich Volume 1, 1933-1934, Princeton University Press
- 開高健, (1991), 声の狩人, 岩波書店
- Klein, M., (1935), A Contribution to the Psychogenesis of Manic-Depressive States, in The Writings of Melanie Klein, Vol. 1, Hogarth Press, London

- (クライン, 安岡 誉訳, (1983), 躁うつ状態の心因論に関する寄与, メラニー・クライン著作集3 愛, 罪そして償い, 誠信書房)
- Klein, M., (1940), Mourning and its Relation to Manic-Depressive States, in *The Writings of Melanie Klein, Vol. 1*, Hogarth Press, London
- (クライン, 森山研介訳, (1983), 喪とその躁うつ状態との関係, メラニー・クライン著作集3 愛, 罪そして償い, 誠信書房)
- Klein, M., (1946), Notes on Some Schizoid Mechanisms, in *Envy and Gratitude and Other Works 1946-1963*, Vintage 1997
- (クライン, 狩野力八郎ほか訳, (1985), 分裂機制についての覚書, メラニー・クライン著作集4 妄想的・分裂的世界, 誠信書房)
- レビン, 諏訪 澄・篠輝久訳, (2015), 千畝 新装版, 清水書院
(Levine, H., 1997, *In Search of Sugihara*, Free Press)
- 村上春樹, (2017), 騎士団長殺し 第1部: 顕れるアイデア編, 講談社
- 村上春樹, (2017), 騎士団長殺し 第2部: 還ろうメタファー編, 講談社
- 村上春樹, (聞き手: 湯川 豊, 小山鉄郎), 村上春樹さんインタビュー 小説家40年と「騎士団長殺し」, 河北新報 2019年6月11日朝刊
- 南波 浩校注, (1973), 紫式部集, 岩波文庫
- 小野清美, (2013), アウトバーンとナチズム—景観とエコロジーの誕生—, ミネルヴァ書房
- パウゼヴァング, 高田ゆみ子訳, (2012), そこに僕らは居合わせた, みすず書房
(Pausewang, G., *Ich war dabei Geschichten gegen das Vergessen*, Patmos Verlag GmbH & Co.KG, Dusseldorf, 2004)
- ポムゼル, ハンゼン, 石田勇治監修, (2018), ゲッベルスと私, 紀伊国屋書店
(Pomssel, B and Hansen, T.D., *Ein Deutsches Leben*, Europe Verlag GmbH)
- スタイン, 入江良平訳, (1999), ユング 心の地図, 青土社
(Stein, M., (1998), *Jung's Map of the Soul: An Introduction*, Carus Publishing Company)
- 鷺田清一, (2019), 生きながらえる術, 講談社
- 渡辺勝正, (2000), 真相・杉原ビザ, 大正出版
- 山極寿一, (2011), 基調講演「暴力の由来」, ユング心理学研究第3巻, 創元社